一般寄稿

児童教育学科

グローバル時代の大学における道徳教育
―児童教育学科マレーシア臨地研修に焦点をあてて―

中山 博夫 Hiroo NAKAYAMA
人間学部児童教育学科教授

1 グローバル時代の道徳教育

グローバル化の進展に伴い、ヒト、モノ、カネ、情報が国境を越えて大量に移動する状況が出現した。今や、グローバル時代が到来したのである。日本国内における外国人登録者数は、平成28年12月末には2,913,314人[(1)]に達している。この数は、国内都市人口第3位の大阪市を上回るものである。多文化共生が、現実として求められるようになったのである。ところが、ヘイトスピーチは後を絶たないし、一部の過激派集団の活動に起因するイスラームに対する誤解や偏見も世上に溢れている。現代の教育課題の一つは、それらの偏見や差別意識を払拭し、多文化共生社会を目指す教育であると確信している。そして、そのような多文化共生社会における道徳教育が求められているのである。

平成27年3月の学習指導要領一部改正により、小学校、中学校の領域としての「道徳」が「特別の教科 道徳」（以後、道徳科と略記する）となった。そして、平成30年度から道徳科は完全実施されることになった。道徳的判断力を重視した、考え、議論する道徳科の授業が開始されることになったのである。その改定では、従前は小学校中学年からの指導であった「国際理解、国際親善」の内容が、低学年から行われることになった。それは、グローバル化に伴った多文化社会到来の影響であると考える。

道徳とは、特定の集団や社会における価値や規範の総

体である。そのような価値や規範の総体を、児童・生徒に内在化させるものが道徳教育である。そして、今や多文化状況を当然とする地球社会における道徳教育が模索されなければならなくなった。

小中学校では、道徳科を要として学校教育全体を通して道徳教育が行われる。では、大学における道徳教育とは、どのように行われるのであろうか。大学には道徳科は存在しない。だが、特定の集団や社会における価値や規範の総体を学生に内在化させるものが道徳教育であるならば、大学では教育・研究活動を通して道徳教育を行うのだと考える。中央教育審議会答申では、高等教育においては「専攻分野についての専門性を有するだけでなく、幅広い教養を身に付け、高い公共性・倫理性を保持しつつ、時代の変化に合わせて積極的に社会を支え、あるいは社会を改善していく資質を有する人材」[(2)] を育成しなければならないと述べられている。つまり、大学における専門教育や教養教育を通して、高い公共性や倫理性を備えた学生を育成しなければならないのである。すなわち、その道徳教育は教育・研究活動の中で価値観や規範意識を形成していくものである。

2 マレーシア臨地研修特別プログラム

児童教育学科では、平成27年度よりマレーシア臨地研修特別プログラムを開始した。そのプログラムは、小学校教員を志望する学生が多いという学科の特性を考えて、計画されている。すなわち、マレーシアのペナンにあるマレーシア科学大学（国立総合大学）言語学部において実用英語の特訓をして、小学校や自閉症児教育センター、老人ホーム等でボランティア活動を行う研修である。このマレーシア臨地研修を取り上げて、大学における道徳教育を考えてみたい。

まずは、マレーシア臨地研修特別プログラムの概要（平成28年度）について説明する。プログラムは、以下

表1　平成28年度 マレーシア臨地研修特別プログラム概要

	午前	午後	夜間
事前	プログラム説明・マレーシア概要・多文化社会・教育制度・宗教等		
3．5日（日）	成田発		ペナン着
3．6日（月）	歓迎式・マレーシア講義	マレーシアダンス体験	ミーティング
3．7日（火）	英語特訓	英語特訓	ミーティング
3．8日（水）	英語特訓	英語特訓	ミーティング
3．9日（木）	ミンデン・ハイト小学校（授業参観等）	日本文化紹介準備	ミーティング
3.10日（金）	ミンデン・ハイト小学校（日本文化紹介）	自閉症児教育センター	ミーティング
3.11日（土）	老人ホーム	老人ホーム	ミーティング
3.12日（日）	グループ・プレゼンテーション（English）準備	自由行動（複数行動）	ミーティング 日本文化紹介準備
3.13日（月）	ペナン日本人学校	自閉症児教育センター	ミーティング
3.14日（火）	グループ・プレゼンテーション（English）	ジョージタウン歴史探訪	ミーティング
3.15日（水）	自由行動（複数行動）	閉講式・ペナン発	
3.16日（木）	成田着		
事後		報告書作成	

のねらいを基に計画された。

○広い視野をもち、ものごとを相対的に見ることのできる学生を育てる。

○多文化状況において、積極的に活動できる学生を育てる。

○文化的に少数者や立場の弱い人たちを大切にできる学生を育てる。

学生には、以下の学習活動目標を示した。

○複合多民族国家マレーシアにおいて、拙いながらも英語等の外国語を駆使して、小学校等でのボランティア活動を行い、多文化社会に応じたボランティアシップの在り方を学ぶ。

臨地研修を実施したペナンでの協力団体は以下の通りである。

・マレーシア科学大学 日本文化センター
・マレーシア科学大学 言語学部
・ミンデン・ハイト小学校（国立小学校）
・自閉症児教育センター（民間団体）
・ペナンホーム（老人ホーム；民間団体）
・ペナン日本人学校

筆者中山が13名の学生（男子５名、女子８名）を引率し、プログラム指導を行った。

3 マレーシア臨地研修特別プログラムと道徳教育

大学における道徳教育は、その専門教育と教養教育とを通して、学生の内面に高い公共性や倫理性を内在化させていくことにある。つまり大学教育を通して、社会の発展に貢献していく公共的・倫理的な価値観や規範意識を形成していくことである。

児童教育学科のマレーシア臨地研修特別プログラムに即して考えると、以下のようになる。日本語がほぼ通じないという状況下で、ムスリムの多い多文化社会の小学校、自閉症児教育センター、老人ホーム等において、学生が主体となったボランティア活動を行うプログラムを実施する。すなわち、多文化共生を目指した体験型学習活動を行うのである。そして、毎晩のミーティングでの振り返りとグループ・プレゼンテーションのための話し合い、また報告書作成を通して、自分たちの活動の意味や価値を吟味していく。その中で、価値観や規範意識が練られていくである。

多文化共生に向けた道徳が培われるためには、マレーシアで児童に日本の子どもの遊びや歌を紹介したり、自閉症児やお年寄りとの交流をしたりするだけでは不十分である。自分たちの活動を振り返り、考え語り合う中で、多文化社会で共に生きるための方策や価値観について自己の考えを深める。さらに、報告書作成において、キャリア形成の観点から自己の考えを練り直していくことが大切である。主体的な体験活動と、自己を振り返り自己を見つめ、仲間とともに考え語り合い、未来に向けて深く考える中で、多文化共生社会に対応した価値観や規範意識、すなわち多文化共生社会における道徳が培われると考える。

学生指導では、事前指導・プログラム指導・事後指導を通して、イスラームについて考えさせてきた。イスラームについては、学生にとって全く知識がなかったり、多分に偏見をもったり誤解している分野だと考える。ほとんどのムスリムの人たちが、ごく普通の人たちだという感覚が、多文化共生社会を意識した道徳教育では重要だと考える。最近は、街を歩いていても列車に乗っていても、ヒジャーブを被った女性を見かけることがある。また、ムスリムの児童・生徒が学校に編入してくることも起きている。学生が将来小学校教員になった際に、現実に対応しなければならない問題である。イスラームを意識した道徳教育は、多文化共生教育にとって重要な要素であると考える。

イスラームを含めた多文化共生社会における道徳は、マレーシア臨地研修特別プログラムのねらいと重なる。すなわち、広い視野をもってものごとを相対的に見つめ、文化的に少数者や立場の弱い人たちを大切にし、多文化状況において積極的に活動するための道徳である。

その道徳を学生の内面に具現化させるためには、学科の他の科目との連携も重要である。「国際ボランティア論」「地球市民教育論」「多文化教育論」「特別支援教育論」などの科目との連携は重要だと考える。自分たちの活動について、さまざまな観点から幅広く、深く考えさ

せることによって、学生の学びは豊かなものになる。もちろん、道徳教育としての成果も期待できる。これまでの指導では手薄の部分であったが、今後意図的に上記の科目等での学びと絡み合っていくように留意していきたい。

4　学生の活動と感想

学生の活動を概観し、彼らの代表的な感想コメントから、その思いについて考えたい。

まずは、マレーシアで出会った人々についてである。学生はマレーシア科学大学日本文化センターのボランティア学生、言語学部の教員、ボランティア先の教職員・職員の方々、宿泊ホテルや食堂の従業員など、さまざまな方々のお世話になって活動や交流を進めてきた。

- マレーシアの人々の親切さや優しさに感動した。
- 言葉の壁もあるが、それをこえて、優しさや感動することを感じた。
- とても温かく親切でいい人たちが多く、自分たち日本人は本当に世界を知らない井の中の蛙大海を知らずであったと痛感しました。
- 文化や国の風習は違えど人は万国共通ということを本当の意味で理解することができた。

マレーシアに限らず東南アジア全体にもいえることだが、学生の多くはその国の概況や、そこに暮らす人々について、あまり知識をもっていない。学生にとって、未知の世界だといってもよい。学生の多くは、その未知の世界で出会った人々の心の温かさに感動した。そして、同じ人間だという見方が強まったのである。

次は、ミンデン・ハイト小学校での活動である。ミンデン・ハイト小学校の校長からは、折り紙と日本の民族舞踊を教えて欲しいとリクエストがあった。そこで、学生は鶴などの折り紙の折り方を児童に教えたが、児童は実に大喜びした。その他に、日本のお祭りの雰囲気を紹介するために、割り箸鉄砲での射的や折り紙での手裏剣投げのブースをつくったが、これには児童からも教師からも人気が集まった。また、「上を向いて歩こう」や「涙そうそう」などの歌も披露したのだが、なかには涙を流しながら聴き入っていた児童もいた。

- 私達にとっても子どもたちにとっても、非常に楽しい時間を共有することができた。
- 笑顔と心でコミュニケーションをとり、全力で楽しんでくれた子どもたちを見て心からHappyな気持ちになりました。
- 外国の子どもたちも日本の子どもたちと同様に、純粋な心を持っており、周りの人に元気を与えるような存在なんだと実感した。

学生は児童との交流を喜び、児童と打ち解けていった。活動の中で、学生は日本人であってもマレーシア人であっても、同じ人間だという感覚を強くもつようになったのだと考える。

次は、自閉症児教育センターでの活動についてである。自閉症児教育センターは、ライオンズクラブの援助を受けて設立され、マレーシア科学大学教育学部で心理学の研究をされているダトー・スージー博士も、ボランティア校長として、その運営に尽力されている。学生は、センターの指導員の指示や指導に従って、児童の学習訓練に携わった。また、児童全員を対象としたレクリエーション指導をしたりした。ここでも、学生は素晴らしい体験をすることができた。

- だんだんと打ち解け子どもが笑ってくれた時に、子どもの笑顔はいつでも最高だなと感じました。
- 自閉症児との接し方や障がいそのものについて、深く考えさせられる良い機会となりました。
- だるまさんがころんだやジャンケン列車など、心が一つになった瞬間のみんなの笑顔は、とても幸せそうでした。
- 自閉症児と直接関わるのは初めてだったので、その分多くの学びがありました。
- 一緒にソーラン節をやったり、ゲームをやったりすごくすごく充実しました。とても楽しいひと時でした。

1名の1年女子学生以外は、すべて2年生というメンバー構成であった。つまり、全員が3年次の特別支援学校実習（教職課程の介護等体験）は体験していないのである。学生にとって自閉症児との交流はほぼ初めてのことであり、とても新鮮な感じを受け楽しくも感じていた。学生は、自閉症児との関わりの中で自己効力感を感

じることができたと考える。

最後にペナンホームでの学びを紹介したい。そこは、ペナンで最大規模を誇る老人ホームである。そこには、ほぼ寝たきりの方も入居されているし、車イスで生活されている方もいる。もちろん元気なお年寄りも生活している。学生は、ここで食事の配膳をしたり、天井のファンの清掃をしたりした。また、お年寄りに折り紙の折り方を教えたり、ソーラン節や「上を向いて歩こう」「涙そうそう」などの歌を披露したりもした。

・折り紙を教えるときに、言葉が通じない時もあったが、最後まで一緒に折ってくれて、感動した。言葉の壁もあるが、それをこえて、優しさや感動することを感じる。
・日本語の歌のリズムに合わせて手拍子をしてくださったり、曲が終わった際には笑顔で拍手をしてくださいました。この暖かい一挙一動に私は感動せずにはいられませんでした。
・歌詞の意味を理解できなくても、歌という文化は世界共通です。私達が歌う事で感動していたご老人を見て、そう考えました。
・折り紙を一緒に折っているとき、歌やソーラン節、すれ違った時のお年寄りの方々の笑顔はとても素敵でした。

ここでも学生は、自閉症児教育センターと同様に自己効力感を感じることができたのだと考える。

5 学生の学びと道徳教育

学生の感想から分かることは、日本人であってもマレーシア人であっても、同じ人間という感覚を学べたことと、自己効力感を感じることができたことだと考える。次に、学生の臨地研修報告書の代表的な記述から、マレーシア臨地研修特別プログラムと道徳教育との関わりを考えてみたい。

・マレーシア研修を通しての私の成長は、心の成長です。私は自分自身、マレーシアに来る前と後で、物事へ対する意識が大きく変わったと思います。…（中略）…マレーシアで多くの人と出会い、学び体験してきました。できないと思っていることでも、挑戦をすれば多くの人が助けてくれて、できるようになると実感しました。
・昔から困難に立ち向かったり新しいことを始めようとしたりすることに対して、不安と恐怖を感じてしまいがちでした。すべてが改善されるにはまだ時間がかかりそうですが、この研修中にその１歩を踏み出すチャンスはいくつもあったと思います。
・日本独特の違いを認めることが容易ではない文化の存在を感じ、実感しました。この学びは、外から日本を見つめなければ気付くことのできなかったものであると思います。この日本の独特の文化に対抗していかなければならないのだと、私は思います。

学生は自分自身を振り返り、自分の中にチャレンジ精神が芽生えてきたことに気づいたり、異なるものを排除しないという思いをもったりするようになってきたのだと考える。寛容さをもって、新たな自分を追い求め挑戦したいという思いを強くもったのである。それらは、価値観や規範意識として育っていく重要な萌芽であると考える。すなわち、マレーシア臨地研修特別プログラムは、多文化共生社会において主体的に生きていく上での道徳教育として作用したのだと考える。多文化共生が求められるグローバル時代の道徳観の芽、すなわち多文化共生社会における価値観や規範意識の芽が、学生の内部に芽生えてきたのである。

価値観や規範意識は生活に根ざして形成されていくものである。大学における学びのそこかしこで、彼らの心に芽生えた萌芽を大きく育てていけるように、十分な肥料を与えていきたい。それが、私の願いである。

謝辞

なお、学生の感想について学生の承諾を得て引用をした。記して感謝申し上げる。

註

（1）法務省（2016）「在留外国人統計（旧登録外国人統計）統計 http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_touroku.html（2017年８月10日閲覧）
（2）中央教育審議会（2005）「我が国の高等教育の将来像（答申）」http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1335581.htm（2017年８月31日閲覧）